

『古事記』 弟橘比売命入水譚研究史小考

入江 英 弥

一 はじめに

(1) 本稿の目的

『古事記』倭建命の東征譚に、弟橘比売命が入水する話がみられる。当該箇所は次の通りである。

其より入り幸して、走水海を渡りし時に、其の渡の神、浪を興し、船を廻せば、進み渡ること得ず。爾くして、其の后、名は弟橘比売命、白ししく、「妾、御子に易りて、海の中に入らむ。御子は、遣さえし政を遂げ、覆奏すべし」とまをしき。海に入らむとする時に、菅置八重・皮置八重・繩置八重を以て、波の上に敷きて、其の上を下り坐しき。是に、其の暴浪、自ら伏ぎて、御船を進むこと得たり。爾くして、其の後の歌ひて曰はく、

さねさし 相模の小野に 燃ゆる火の 火中に立ちて 問ひし君はも

故、七日の後に、其の後の御櫛、海辺に依りき。乃ち其の櫛を取り、御陵を作りて、治め置きき。⁽¹⁾

これが印象深い話であることから、これまでにさまざまな研究がなされてきた。とりわけ、近年では、弟橘比売命が発した言葉や歌に焦点をあてた考察が行われている。すでに、筆者はこの話の舞台となった「走水海」の分析を出発点にして、この話の意味と形成に関する考察を行ったことがある。⁽²⁾

この話を対象にした研究は多岐にわたるためか、これまできちんと

した整理がなされてこなかった。あっても文学的な読みによるものとか、文脈に沿ってこの話を分析するものといったくらいの位置づけで、先行研究に関して系統立てた捉え方はなされていない。そこで、本稿では、これまでの弟橘比売命入水譚に関する研究を取り上げて分類し、まとめてみたい。それにより、この話がいかにつえられてきたのかを明らかにする。また、そうした研究に対して評価を試みたい。

(2) 本稿の視点

『古事記』の弟橘比売命入水譚は、『日本書紀』にも同様の話がみられるが、その話と比べて古い側面を持つていてと考えられてきた。

上田正昭氏は、当該は『古事記』と『日本書紀』を比べると、内容上の違いがある。とくに弟橘比売命が入水するときに敷物を敷いて歌をうたったこと、入水して七日後に櫛が流れ着いたとすることから、『古事記』の方がより呪術的な説話になっている。また、「さねさし」の歌は「本来独立の野焼きにおいて歌われたものが、焼津における向火の話に関連づけて挿入されたものようである」と述べた上で、『書紀』よりも『古事記』の文学精神が、恋物語としても生々としており、古い側面を物語っていることは事実である」と結論づける。⁽³⁾ このように当該は、記紀の比較研究から、古い側面をもつ説話だといえる。

一方、吉井巖氏はそうした古い要素を持つものの、当該には「新しい女性像」が描かれていると説く。⁽⁴⁾ 後述するように、弟橘比売命は自らの意志から入水し、主体性を持つ。当時としては、きわだった新し

さが窺える。

このように論者によって捉え方に差がある。当段のどの点に注目したかで、差が生じてしまったのではなからうか。そこで、本稿では、当段に関する先行研究を古いもの順に並べていくのではなく、いかなる点に焦点をあてたかで分類して取り上げてみたい。

なお、本稿では、『古事記』に関する場合、ヤマトタケルノミコトを「倭建命」、オトタチバナヒメノミコトを「弟橘比売命」と記すことにする。

二 話の背景に関する研究

(1) 登場人物に関する考察

① 弟橘比売命の位置

物語に関して、背景から捉えていく方法がある。すなわち、できごと(事件)は、登場人物、時、場所といった背景に基づいて展開すると考えて、そうした背景に焦点をあてて読み解いていく方法である。それゆえ、登場人物の出自、性格などは、大切な研究の対象となる。

東征譚の主人公は倭建命であるが、この段に限って言えば、弟橘比売命を中心にできごとが展開していて、弟橘比売命が主人公だといえる。特徴ある名を持ち、入水という行為は極めて異例といえる。この弟橘比売命をめぐって、次のようなさまざまな研究がなされてきた。

弟橘比売命は、歴史上の人物ではなく、説話上の人物だと位置づけられてきた。とりわけ、その登場の仕方が注目されている。西郷信綱氏は、

常世国から渡来した、世にめづる橘にちなむ称え名ならんと記伝にいうが、それ以上のものがありそうだ。まず、この名がここ
で突如と出てくる点である。(中略)古事記のオトタチバナヒメは、

系譜など背負わず、ほとんど妖精のようにひとり忽然とあらわれ入水する。オト……ヒメという名は佳人を彷彿させる。大山津見神の「姉石長比売」は醜女であったのに対し、「弟木花之佐久夜毘売」は顔よき女であった。オトつまり妹が美女だとするのは説話上の一つの約束で、昔話にいわゆる童宮のオトヒメという名も、そうした約束から生れてきたものに他ならない。⁽⁵⁾

と述べられている。

弟橘比売命はこの段に突如として現れる。しかも、系譜が示されず、「ほとんど妖精のようにひとり忽然とあらわれて入水」して、すぐに退場してしまう。そして、「オト……ヒメ」という、説話に類型的にみられる美女の名を負うことを指摘する。すなわち、弟橘比売命は説話に現れる美女の一人だという位置づけである。

また、弟橘比売命を「后」と記す。すでに指摘されているように、『古事記』の東征譚では「幸」という天皇に関わって使用される字が用いられ、倭建命を天皇に準じて扱っている。⁽⁶⁾ それに応じて弟橘比売命も天皇の妻を示す「后」と表記されているのであろう。この「后」とする点について、倉野憲司氏は、「然るに書紀には弟橘媛のことを『妾』としてゐて、古事記とその態度を著しく異にしてゐる」と指摘されている。⁽⁷⁾

山上伊豆母氏は、入水する場面の描写が『海神の女』トヨタマヒメとの神婚の儀に(中略)相似している「ことから、弟橘比売命は「ヤマトタケルの命の妃であるとともに海神の女らしき伝承」だとされ、

古典神話の王権伝承においては、天神の系譜をつぐヒツギノミコ(太子)の後妃は、海神の女(水の神女)が相応しいという信仰があった。前掲の火ヲリの命の豊玉姫、神武天皇妃も撰津三嶋のミヅクヒの女(タマクシヒメまたヒメタラヒメ)、タチバナヒメへとつづく。ゆえに后妃たる神女はときに海から来りまた海

彼へ去つて行く。⁽⁸⁾

と説かれている。このように当段は信仰的には海神の娘を后にしたという伝承で、そうした話は『古事記』に類型的にみられることから、海神の娘を后妃とする「后妃伝承」の一つとして位置づけられるといふ。

② 弟橘比売命の出自

『古事記』では弟橘比売命の出自が明らかにされないが、『日本書紀』では「穂積氏忍山宿禰が女なり」とある。この点をいかに扱うかによって、弟橘比売命の位置づけが変わってくる。

上田正昭氏は、『日本書紀』におけるこの系譜は編者によって付け加えられたと説く。

しかしこの系譜がどこまで信用できるかは疑問である。『延喜式』の「神名帳」には伊勢国鈴鹿郡に忍山神社のあることを記し、また『成務天皇記』には、穂積臣の祖先として建忍山垂根の女に弟財郎女のあることを記している。あるいは『書紀』の編者はそれらを念頭に入れて挿入したのかも知れない。⁽⁹⁾

上田氏が説かれるように、『日本書紀』の編者が成務記の穂積氏に関する記事に引かれて、あとから「穂積氏忍山宿禰が女」としたとすると、弟橘比売命はもともと系譜を負わない女性だったと考えられる。西郷氏の論と同様に、弟橘比売命は「説話上の主人公」だと位置づけられる。

一方、「穂積氏忍山宿禰が女なり」と記するのは何らかの理由があるはずだと考え、弟橘比売命と穂積氏との関わりから説く立場の論もある。⁽¹⁰⁾ なお、後で取り上げるように、守屋俊彦氏や和田萃氏はこの話を倭建命の東征譚に結びつけたのは穂積氏だと推測されている。⁽¹¹⁾

筆者は、文脈に即して捉えようと、突如現れて直ちに退場する点が大切なのではないかと考えている。「后」とするのであるから出自が示

されてよいはずだが、それが無いのは弟橘比売命の性格に起因するのではなからうか。いずれにしても、『古事記』には弟橘比売命の出自が示されない。まずは、その通りに受け止めるべきではなからうか。

③ 弟橘比売命の性格

弟橘比売命の性格については、本来の性格と当段における性格とに分けて考えられてきた。

もともとの性格について、吉井巖氏は櫛を残すことから、弟橘比売命は巫女性を持つとされる。「弟橘媛が霊果である橘を名とする女性であり、櫛（奇し）を残す女であり、海に入って海神を和めえたことを考えると、この媛の性格が本来巫女的な性格であったことを予想する」と説かれている。⁽¹²⁾ 弟橘比売命は、本来巫女的性格を持っていたという指摘である。これは、多くの研究者が指摘してきたところである。

当段における性格について、吉井氏は、

しかし、類話と比較してみても、弟橘媛には際立った新しさがうかがわれる。ただ難に逢ったことを嘆き、悲別を悲しんで入水する他の女性にくらべて、弟橘媛にはみずから死への道を選ぼうとする意志がみられる。それは皇命には従わねばならず、そのためには自分の入水がぜひ必要なのだという媛の自覚から出てくるように思われる。この自覚と意志が、弟橘媛を古い巫女の世界から抜け出させ、その死の描写をいつそう美しいものにしていく。⁽¹³⁾

と説かれている。弟橘比売命は天皇の命令に従うために自分の入水が必要だと自覚し、意志をもって主体的に死を選んだ。その自覚と意志によって巫女の段階から脱却したという。その自覚と意志については、

媛を入水への決断に導いたものは何であったろう。物語の表現に従えば、それはヤマトタケルが天皇の命をやり遂げねばならないというということ、それには自分が身代りにならねばならないという

きわめて単純な論理である。だが、この論理を決断へと具体化したのは、媛のヤマトタケルへの愛であったに相違ない。花やかに衣を翻して波立つ海に身を投げた媛の行動は、そのまま媛の選択であり、その行動には、別離の悲しみと限りない愛と厳しいあきらめの人間的な感情が一度にふきあがって、媛を真直ぐに死へとむかわせていたのである。¹⁴⁾

と述べられている。皇命は必ずやり遂げなければならぬ、そのためには自分が倭建命の身代わりになる必要があると考えた。実行へと向かわせたのは弟橘比売命の倭建命への愛だという指摘である。そして、「愛に生きるために死を選んだ、そのような死をはっきり自覚したおそらく最初の女性像として、『古事記』のなかに輝く位置を占めているように思う」と説明している。¹⁵⁾

本段における弟橘比売命は、巫女的性格がうかがえるにしても、自ら自分の進むべき道を選択した、主体性ある女性として捉えるべきであろう。吉井氏が説くように、「新しい女性像」として造形されたと考えられる。

(2) 場所に関する考察

話の背景として重要であるのは登場人物のほか、場所である。この話の舞台は「走水海」で、現在の浦賀水道に比定されている。これについての研究はほとんどなされてこなかった。そこで、筆者は歴史的側面、自然環境的側面、信仰的側面に分けて考察を行ったことがある。¹⁶⁾ ここでは、紙数の関係上、歴史的側面に関してだけ紹介する。

入水譚の舞台となった走水の海はいかなる空間であったのか。この海は古東海道の海路として利用されていて、大和朝廷にとって東国経営の要となる重要な場所だったと考えられる。交通路は、政治、軍事、商業の面からいって生命線となっていたと察せられる。

これは、この海に面した「御浦郡」が大和政権から重視された点からも窺える。第一に「御」という字を用いて「御浦郡」と記された点、第二に御浦郡走水郷に山形女王の食封が設置された点、第三に倭建命を系譜上の祖に持つ鎌倉別氏が御浦郡を支配した点である。この鎌倉別氏は古代において鎌倉郡や御浦郡を支配したとされ、大和政権と深く結びついた勢力だと考えられている。一九九九年、神奈川県三浦郡葉山町長柄・逗子市桜山に新たに発見された「長柄・桜山古墳」は、県内最大級の規模をほこる前方後円墳で、四世紀後半に大和との関係により成立したとみられ、その被葬者としてこの鎌倉別氏の先祖が想定されている。

要は、「走水の海が古東海道の要衝に位置することから大和政権の東国経営の要となっていたこととともに、この走水の海に面した御浦郡が朝廷と深く結び付いていたという歴史的側面を背景にして、走水の海がこの物語の舞台として選ばれた」と結論づけた。

三 話の内容に関する研究

(1) 物語全体から捉えようとした考察

東征譚全体から当段を捉えようとした研究がある。

中西進氏は、東征譚は倭建命を主人公にする「流離譚」だと捉え、「倭比売」「弟橘比売」「美夜受比売」といった三人の女性を支点に据えた物語だとする。すなわち、当段を「貴種流離の一人の若者を迎えた女性の物語」だと位置づける。¹⁷⁾ そして、「美夜受は聖女として倭建の東行に骨格を与え、弟橘はその上に感傷的な抒情性を塗りこめた。両者はお互いの存在によって倭建の流離譚を増幅しているというべきであろう」と結論づける。¹⁸⁾

すなわち、折口信夫が説いた「貴種流離譚」が東征譚に当てはまる

と考え、さすらつてきた倭建命を迎える女性の一人として弟橘比売命を捉える。そして、この弟橘比売命を主人公とする物語によって東征譚に「感傷的な抒情性」が加えられたとする。要は、東征譚を彩る物語の一つとして当段の意味があるということであろう。

このように東征譚全体を俯瞰してみたときに、当段がいかなる意味を持つかを捉えようとした研究がある。

(2) 類話との比較から捉えようとした考察

当段と似た表現がみられ、関係性がうかがえる火遠理命の話と比較を行い、その相違点からこの話を捉えようとした研究がある。

大脇由紀子氏は、『古事記』の火遠理命の海宮訪問譚において、「火遠理命は海神の女を妻とし、海の呪力を得て兄火照命を服従させて皇統を継ぐように、「海が皇統にとって重要な転機の間となつてゐる」ことから、

『古事記』編述者にとって、海難物語は「転機の間」として必要だったのであり、渡りの神はその皇位継承の資格を確かめるために登場させた存在とみるべきである。そして、火遠理命の場合とは逆に、皇后になるに相応しかなかった女性を手放したことで、彼にとっての「転機の間」とはならなかったのである。すなわち、彼の皇位継承の資格はここで一つ消失したのである。¹⁹⁾

と述べられている。すなわち、海の間が皇統にとって転換点になつていて、当段では走水の海において皇后にふさわしい女性を失つたことにより、倭建命は皇位継承の資格を失つたとみる。筆者は、背景論的研究の立場から話の舞台となつた「走水海」に意味があるのではないかと考え、先に取り上げたような考察を行った。

(3) 弟橘比売命の歌謡に焦点をあてた考察

当段には、「さねさし 相模の小野に 燃ゆる火の 火中に立ちて 問ひし君はも」という歌謡がみられる。話のクライマックスである入水の場面に置かれ、重要な位置にあることから、この歌の分析によって当段の意味を捉えようとした考察がある。

青木生子氏は、「さねさし」歌謡を「古事記」によれば、この歌は姫がいよいよ入水する直前によまれたものになつてゐる。死を前にして、かつて夫の命が火難にあわれた折、あの時自分によせてくれた夫の強い愛情を、一瞬のうちに蘇らせその感激の喜びを歌い放つた。それは何よりも夫への愛と感謝の言葉なのである」と述べた上で、この入水の場面の意味を、

この歌を添えることによって、姫の行為を、夫君の国家的使命遂行の為に払つた自己犠牲の精神などというものより、夫への深い信頼と愛情の心から生れた献身として、描いた古事記の作者にも感謝せずにはいられない。序でながら、古事記の作者は、姫の死後命が足柄山に登つて発せられた「吾妻はや」の切なる歎きを記すことを忘れてはいなかつた。²⁰⁾

と説かれている。

当段に関して、皇命の絶対性を主題とする話であるのか、夫への献身を主題とする話であるのか、研究者によってその捉え方が分かれてきた。青木氏は、この歌謡を重視して、弟橘比売命の夫への愛と感謝が読みとれることから、当段を「夫への深い信頼と愛情の心から生れた献身」が主題であると捉えられている。

この歌謡の機能を捉えようとした論もある。

小村宏史氏は、この歌謡が東国の王化を示すいくつかの要素を結びつける働きを持ち、それが享受者に受け止められるようになっていくと説く。

では、『古事記』編述者が「さねさし」歌謡に託した機能とは何であったか。ヤマトタケルは『古事記』の作品世界において、天皇になれない存在として造形されている。その意味でオトタチバナヒメの喪失は、皇位継承の資格喪失とかわろと考えられる。それは散文脈上の要求である。しかし歌謡では逆に、詠者であるヒメのタケルへの想い、そして歌に描かれた事象におけるタケルのヒメへの想いが語られ、両者の情愛のレベルでの結びつきの強さが強調されていく。その悲劇的な恍惚を伴う叙情の拘束力によって、享受者の意識下で、尾張を起点とし、尾張に帰着するこの東国遠征全体が、オトタチバナヒメの陰をまもって認識されることになる。⁽²¹⁾

そして、折口信夫の説く「韻文の持つ記録性」という捉え方を用いて、次のように述べる。

「さねさし」歌謡は、散文脈中にある東国王化の記録を呼び起こす装置なのである。享受者はこの歌を思い起こすたびに、水難の場面だけでなく、相武の野での国造征討と、アヅマの命名、およびそのアヅマを冠した国造の任命を連鎖的に思い出すことになる。⁽²²⁾

すなわち、「さねさし」歌謡の「叙情の拘束力によって、火難・水難伝承、アヅマの命名、およびアヅマの名を負う国造の任命、という散文脈にちりばめられた王化の要素を、一連のものとして享受者に認識させる」というのである。

確かに、編者の段階ではそのように説くことが可能であろう。入水に際してうたわれるこの歌が、火難に際して気遣ってくれた夫への愛と感謝を内容とすることによって、当段が直接火難の話と結びつく。そして、この絶唱と呼応する形で、弟橘比売命を偲んで倭建命が「あづまはや」と嘆く場面が後に置かれている。編者の意図として、前後

とつなげるために意図的にこの歌謡が置かれたとみてよい。

だが、享受者の段階ではいかがであろうか。津田氏が指摘するように、弟橘比売命は唐突に現れ、あとから付け加えられたためか、物語の続き具合が少し不自然な感じがする。火難の場面を思い出させるにしても、この歌謡が国造征伐や、アヅマの名を負う国造の任命といった東国王化の要素を享受者に思い起こさせるであろうか。歌の力という観点からすると、むしろ、享受者は歌に込められた夫婦の情愛に感動し、その余韻に浸ることになるのではなからうか。

(4) 弟橘比売命の発語に焦点をあてた考察

『古事記』倭建命の系譜記事において、「入海弟橘比売命」と記されている。田中智樹氏は、どうして「入海」と冠せられるのかを問題にして、それを解くにあたって当段における弟橘比売命が発した言葉に注目する。すなわち、「妾、御子に易りて、海の中に入らむ。御子は、遣さえし政を遂げ、覆奏すべし」とある点である。

まず、「御子」について、「倭建命が天皇の名代であることを読者に認識させる語としてわざわざ後の言葉の中に用いている」とし、次に「政」については、「天皇或いは神からの命令によって行われるべき行動を表現する文字であり、当該本文の『政』も倭建命の征討が景行天皇の命令によるものであることを明らかにするために用いられている」とする。そして、「覆奏」については、用例の検討から「天照大御神や天皇の命令は『覆(復)奏』されることで完結し、逆に『覆(復)奏』が果たされなければ命令は完結していないことが分かる」と説明している。その上で、

弟橘比売命の発語は景行天皇と倭建命の関係が「天皇―皇子」という関係であることを明示し、景行天皇が征討伝承の中心であることを表現しており、弟橘比売命の存在意義もここにあると考

えられる。弟橘比売命の役割は天皇を中心とした世界を描こうとする『古事記』にあつて非常に重要であり、その結果である弟橘比売命の走水入水は讃えられるべき功績として認識されていたと考えられる。『古事記』の倭建命征討伝承における景行天皇の存在は希薄である。しかしこれは物語の表面的な読解に他ならず、編者は弟橘比売命の発語によって倭建命の全ての行動は天皇の命令によるものであるということを表現したと考えるのである。⁽²⁶⁾

と述べ、『古事記』における弟橘比売命の入水は、天皇の『御子』の后としての行動であり、『天皇―御子』を明示し、皇命の絶対性を説くために構想された物語と考えられる⁽²⁷⁾と結論づける。そして、「入海」という表現は「天皇家によって称賛されるべき弟橘比売命の功績がその名に冠されたのであろう」と推測されている。このように弟橘比売命の発語を重視すると、本段は天皇の命令の絶対性を説くためであると考えられる。

以上のように、弟橘比売命の歌謡に焦点を当てる場合と、弟橘比売命の発語に焦点を当てる場合とは、内容の捉え方に大きな差が生じてしまうことがわかる。

四 話の形成に関する研究

(1) 当段の形成に関する考察

①この話が東征譚に付加されたとする考察

当段の話がいかに形成されたかを捉えようとした研究がある。当段は、倭建命の物語に新たに加わったものではないかと考えられてきた。『古事記』の倭建命東征譚は、ある段階で改変されたものだという見方である。津田左右吉氏は、

走水に至つて忽然として現はれたタチバナ姫の物語は、後から

新に作り添へられたものか、又は他の物語とは無関係な別の主題の説話があつてそれが結びつけられたものか、何れかであるらしく、それは、命の出発の際にも伊勢に於いても妃として姫の伴はれたやうな様子が少しも見えず、特にミヤズ姫の物語は此の姫の伴はれたこととは調和し難いものであることから、知られるのであるが、其の作り添へかた結びつけかたが甚だ機械的である。⁽²⁸⁾

と述べられている。弟橘比売命が唐突に現れることに注目し、東征譚において弟橘比売命が后として伴われてきたことが窺えないことや、伴われていたとすると当段の前に位置する美夜受比売との結婚の話と調和性が取れなくなることから、機械的につけ加わったものと推測されている。また、「詩人」のような創作者が関与したとすると、弟橘比売命を前段に位置する野火の難の話に登場させ、物語に融合させたと考えられるが、それが無い。したがって、創作者の手が加わっていない。そして、この物語が伝説として存在していたのであれば、あとから加わった話が主たる話の中に織り込まれるはずだが、それがみられない。これは、倭建命の一連の物語が一つの伝説として存在したわけではなかったことを示すとされる。

当段は、東征譚にあとから加えられたものだという結論である。また、創作者の関与はなく、一つの伝説を基にするわけではないと指摘されている。要は、東征譚が編纂される時に、ある段階でこの段が挿入されたという捉え方である。その裏付けとなったのは、弟橘比売命の唐突な現れ方と、当段が前後と調和性に欠けるといふ点である。この指摘は重要ではなからうか。確かに当段にみられる歌謡により、野火の難の段と結びつくが、全体からすると物語上の融合性に少し欠けているように感じられる。

②民間伝承が宮廷伝承に取り込まれたとする考察

この話はずっと在地の民間伝承だったが、それが中央の宮廷伝承

に取り入れられた結果、この段ができあがったとする研究もある。和田萃氏は、この話が中央にもたらされる契機として安閑天皇の時代に成立したとされる武蔵国の「橘花屯倉」の存在をあげる。

聖なる樹木、橘をその名に含むオトタチバナヒメが、海神に捧げられたとの説話は、もともと、南武蔵地方の沿岸部で語られていたものと推測される。そうした説話が、大和の勇者で、死を予感しながら東征に赴いたヤマトタケルの物語に結びつけられ、物語をより一層悲劇的に彩る女性として、オトタチバナヒメが配された。その契機として、南武蔵における橘花屯倉の成立があげられる。(中略) しかし、この橘花屯倉出身の美しいオトタチバナヒメが、何らかの事情で走水の海に入水して果てたとの話が、大和王権による橘花屯倉の設定の結果、大和に伝わり、後に、ヤマトタケル伝承に結びつけられたとの想定は、さほど無理なものではあるまい。³⁰⁾

すなわち、弟橘比売命の話は、もともと南武蔵地方沿岸部で語られていたが、橘花屯倉の成立を契機として大和に伝わり、後に倭建命の物語に結びつけられたという推測である。³¹⁾ この話が倭建命の話と結びついたのは、安閑天皇の時代以降ということになる。それから、大和に伝わったこの話が、誰の手によって倭建命の話と結びつけられたのが問題となる。和田氏は、穂積氏だと推測している。在地の民間伝承から中央の宮廷伝承へという流れを想定して、この話が中央へ運ばれたきっかけとして武蔵国の橘花屯倉の成立をあげる。『日本書紀』安閑天皇元年(五三四)の記事に、武蔵国の国造の地位をめぐる争いが起こり、朝廷の裁定によって笠原直使主が国造となり、天皇のために四つの屯倉を設置したとある。そのうちの一つが橘花屯倉だった。和田氏が指摘するように、この橘花屯倉の想定地と当段の舞台となった「走水海」とは少し離れているが、武蔵国の女

性が相模国の走水の海で入水したという話があっても不思議ではない。ただ、先に指摘したように、「御浦郡」と朝廷とは密接な関わりがある。したがって、走水の海に面した御浦郡と朝廷との関係性から、まずは受け止めるべきではなからうか。また、穂積氏の関与は、『日本書紀』の編纂時に想定できても、『古事記』ではいかがであろうか。弟橘比売命の出自が示されないのは、倭建命の系譜記事でも「入海弟橘比売命」と記されるように一貫している。

③ 「習俗から文学へ」と昇華して成立したとする考察

このように当段が倭建命の東征譚に初めからあったわけではないとすると、いったん東征譚とは切り離してこの話独自の形成過程を論じる必要がある。

守屋俊彦氏は、まず、櫛を納めて墓を造ったとある点に注目し、櫛が弟橘比売命の象徴だと捉え、櫛が巫女であることの標示になっている例があることから、櫛を持っていた弟橘比売命はもともと巫女だった。しかも、橘を名に持っていることから、橘に依りつく神、すなわち海の神に仕える巫女だった。また、火遠理命と豊玉毘売命との聖婚の場面と同様に、渡りの神のもとへ赴く際に敷物を敷くことから、海の神と聖婚する巫女だった。そして、海の神との結婚の結果、その神が持つ「魚を召集し、魚に命令する能力」と、「潮の干満を自由に調節する能力」とを得たと推測する。³²⁾ この考えをもとに、次のような筋道でこの話が形成されたとする。

第一に、呪儀の段階を想定する。「この物語の一番の下地には、こうした巫女による、海を自由に支配し、安全に航行するための呪儀のようなものがあつたのではないかという気がするのである」と述べ³³⁾

第二に、習俗の段階を想定する。当段では、弟橘比売命は献身を行う存在として位置づけられる。呪儀の段階を第一段階とすると、次の

献身の段階へは少し距離がある。そこで、その間に習俗の段階を挟むと、無理がないのではないかと説く。

それにしても、呪儀と献身というのでは、同じように海と女性にまつわることではあるが、その間に幾らか隔たりがあるような気がするのである。呪儀は巫女にとっては仕事である。仕事は献身にまで高まるには、その間に今一つクッションになるようなものを置いてみた方がよい。その一つに人身投供の習俗がある。海が荒れた時、それを海の神の怒りと受けとり、和める手段として、人身を海中に投供するというものである⁽³⁴⁾。

この「人身投供」は、大場磐雄氏の論による。大場氏は、水霊の信仰に関して、「井泉池沼湖川等のごとき比較的小規模な自然現象と、海洋大河のごとき大規模なもの」との二つに場合分けして、前者は「飲料や灌漑用等の日常生活に必要なものの恩恵を中心とした信仰」であり、後者は「もっぱら舟行による航路安全がおもな目的である」とする⁽³⁵⁾。そして、航海の安全を図るには海原の神を奉斎する必要がある、その方法として、「海神は海原を大人佩^{うしは}きますゆえ、神霊に奉献するのは直接海中に投入することが最も当を得ていたとすべき」だとして、「投供」が行われた⁽³⁶⁾。その内容は、「金物」、「金物以外の器物」のほか、「人それ自身」を海中に投供したとする。そして、人身献供の例として、『和歌童蒙抄』三に引く「うちあげの涙」などをあげて、

那古若なる女人を海神に投供した物語であるが、これを読んで何びともただちに想起せられるのは倭建命の後弟橘比売の物語であろう。(中略)ただしこれらの物語がはたして事実なりや否やは別な問題であり、自分はわが上代人の間に、人身が海神献供の対象と考えられていたことを窺知すればよろしいのである⁽³⁷⁾。

と説かれている。大場氏は「上代祭祀における神霊への献供型式の一」として、「投供」という形式を設定し、海神への奉斎方法であること

から「海神投供」「海神献供」などという用語を用いて説明している。そして、弟橘比売命の入水譚を人身の海神献供の一例としてあげる。ただし、こうした話が事実かどうかは「別な問題」だと注意を促し、上代の人々が人を海神献供の対象として認識していたことが知らればよいと述べられている。要は、物語にみられる海神への人身献供に對して、直ちに歴史的事実としてみるのではなく、まずは古代の人々の考え方として捉えるべきだという。

第三に、文学の段階を想定する。「習俗から文学へ」と昇華したと考えるというものである。守屋氏は、投供される女性に自らの意志があつたかどうかという点を重視し、弟橘比売命は自らの意志によって入水していると指摘し、「犠牲と献身、—この二つはよく似た行為ではあるが、自らの意志があるかないか、というところに根本的な相違がある。思うに、この物語の作者は、当時一般的に行われていた、女人投供という習俗の中に登場する女性たちに、自らの意志を与えることによって、この物語を作ったのではないだろうか」と述べられている⁽³⁸⁾。弟橘比売命の行為は、意志を持ってなされたことから犠牲ではなく、献身と認められる。この「献身」の段階を「文学」の段階とし、「呪儀から習俗へ、習俗から文学へと昇華した」という論である。すなわち、この話の形成を発展段階的に読み取ろうという試みである。そして、この物語を作つて伝承し、倭建命の東征譚の中に入れたのは、「穂積氏」とであると推測する。

以上のように守屋氏の論は、文学がいかに生成するのかを問題に据えて、当段の形成過程を明らかにしようとした考察だといえる。

五 まとめ

『古事記』弟橘比売命入水譚を対象にした研究を整理すると、次のようになる。

1 話の背景に関する研究

(1) 登場人物に関する考察

① 弟橘比売命の位置

② 弟橘比売命の出自

③ 弟橘比売命の性格

(2) 場所に関する考察

2 話の内容に関する研究

(1) 物語全体から捉えようとした考察

(2) 類話との比較から捉えようとした考察

(3) 弟橘比売命の歌謡に焦点をあてた考察

(4) 弟橘比売命の発語に焦点をあてた考察

3 話の形成に関する研究

(1) 当段の形成に関する考察

① この話が東征譚に付加されたとする考察

② 民間伝承が宮廷伝承に取り込まれたとする考察

③ 「習俗から文学へ」と昇華して成立したとする考察

以上のように、本段の先行研究は話の背景、内容、形成に関するものに大別できる。

背景や形成に関する研究はさまざまになされてきた。背景に関しては、先に取り上げたように三浦半島の古東海道沿いに、当地域と朝廷との密接な結びつきを示す前方後円墳である「長柄・桜山古墳」が発見されたことにより、再考されることになった。従来、武蔵国橘樹郡や橘花屯倉の存在から、この話のもともとの所在地や中央にもたらさ

れた経緯が説かれてきた。むしろ、走水の海を控えた「御浦郡」と朝廷との結びつきに重点を置いて、この問題に取り組む必要があるのではないかということである。

近年では、文脈に即して内容を明らかにしようとする研究が進められていて、とくに弟橘比売命の発語と歌謡に焦点が当てられている。発語に重きを置くと、皇命の絶対性を主題にするとされ、歌謡に重きを置くと、夫への献身を主題にすると説かれる。このように当段の主題に関して、説が分かれているのが現状である。今後は、内容に関して、総合的に把握する研究がなされることが望まれる。

今回は、近代における弟橘比売命入水譚の受容に関する研究に触れることができなかった。国定教科書への取り入れられ方や、図像としての描かれ方などである。他日を期したい。

注

(1) 『古事記』、および『日本書紀』は新編日本古典文学全集(小学館)による。

(2) 拙稿「『古事記』弟橘比売命入水譚の一考察」『伝承文化研究』第九号 二〇一〇年七月

(3) 上田正昭『日本武尊』吉川弘文館 一九六〇年 一五二頁

(4) 吉井巖『天皇の系譜と神話』二 塙書房 一九七六年 三四九頁

(5) 西郷信綱『古事記注釈』第三卷 平凡社 一九八八年 三二七・三二八頁

(6) 拙稿「常陸国風土記」倭武天皇と大橘比売命伝承考」『目白大学文学・言語学研究』

第一号 二〇〇五年一月 四頁

(7) 倉野憲司『古事記全註釈』第六卷・中巻篇(下) 三省堂 一九七九年 一六六頁

(8) 山上伊豆母『古代祭祀伝承の研究』雄山閣 一九八五年 一六八・二六九頁

(9) 注(3)に同じ。一五一頁

(10) 土屋尚「弟橘媛考」『國學院雑誌』第六六卷第四号 一九六五年四月 三五頁

(11) 守屋俊彦「ヤマトタケル伝承序説」和泉書院 一九八八年 一五八頁

和田萃『日本古代の儀礼と祭祀・信仰』中 塙書房 一九九五年 二八六頁

(12) 吉井巖『ヤマトタケル』学生社 一九七七年 一二二頁

(13) 注(4)に同じ。三四九頁

(14) 注(12)に同じ。一二五頁

(15) 注(12)に同じ。一二五頁

(16) 注(2)に同じ。五九・六〇頁

長柄・桜山古墳群に関しては、筆者が二〇〇九年二月八日に開催された藤沢市教育委員会生涯学習課博物館準備担当主催・歴史講演会「相模のヤマトタケル説話をめぐって」に講師の一人として参加した際に、講師の一人でもあった荒井秀規氏よりご教示をいただいた。注(2)の論文はそれを受けて執筆したものである。

(17) 中西進『古事記をよむ3 大和の大王たち』角川書店 一九八六年 一六九頁

(18) 注(17)に同じ。一七七頁

(19) 大脇由紀子『古事記説話形成の研究』おうふう 二〇〇四年 九一頁

(20) 青木生子『青木生子著作集』第八巻 女流歌人篇 おうふう 一九九八年 二六頁

(21) 小村宏史「ヤマトタケルの東征―『さねさし』歌謡に導かれる王化の要素―」「古事記年報」五一 二〇〇九年一月 四五・四六頁

(22) 注(21)に同じ。四六頁

(23) 田中智樹「倭建命系譜考―系譜に記された『入海』の意義―」「古事記年報」四五 二〇〇三年一月 二四頁

(24) 注(23)に同じ。二五・二六頁

(25) 注(23)に同じ。二七頁

(26) 注(23)に同じ。二九頁

(27) 注(23)に同じ。二九頁

(28) 注(23)に同じ。三〇頁

(29) 津田左右吉『日本古典の研究』下 岩波書店 一九五〇年 四五三・四五四頁

(30) 注(11)和田に同じ。二八四頁

(31) 前川明久氏は、「この伝承は六世紀前半または中葉において橘花屯倉からの貢進を通

して物部氏を介し大和の官廷に伝えられたのであろう」と説く(「ヤマトタケル東征伝説の一考察―弟橘媛入水説話の成立をめぐって―」「日本歴史」第三三七号 一九七六年六月 三〇頁)。

(32) 注(11)守屋に同じ。一四四・一四五頁

(33) 注(11)守屋に同じ。一五二頁

(34) 注(11)守屋に同じ。一五二頁

(35) 大場磐雄『祭祀遺跡―神道考古学の基礎的研究―』角川書店 一九七〇年 四〇五頁

(36) 注(35)に同じ。四〇六・四〇七頁

(37) 注(35)に同じ。四〇九頁

(38) 注(11)守屋に同じ。一五四頁

参考文献

津田左右吉『日本古典の研究』上 岩波書店 一九四八年

津田左右吉『日本古典の研究』下 岩波書店 一九五〇年

上田正昭『日本武尊』吉川弘文館 一九六〇年

相磯貞三『記紀歌謡全註解』有精堂出版 一九六二年

今井福治郎『房総の祭』桜楓社 一九六五年

徳光久也『古事記の批評的研究』北海道出版 一九六六年

大場磐雄『祭祀遺跡―神道考古学の基礎的研究―』角川書店 一九七〇年

吉井巖『天皇の系譜と神話』二 塙書房 一九七六年

吉井巖『ヤマトタケル』学生社 一九七七年

倉野憲司『古事記全註釈』第六巻・中巻篇(下)三省堂 一九七九年

山上伊豆母『古代祭祀伝承の研究』雄山閣 一九八五年

中西進『古事記をよむ3 大和の大王たち』角川書店 一九八六年

西郷信綱『古事記注釈』第三巻 平凡社 一九八八年

守屋俊彦『ヤマトタケル伝承序説』和泉書院 一九八八年

和田萃『日本古代の儀礼と祭祀・信仰』中 塙書房 一九九五年

- 青木生子『青木生子著作集』第八卷 女流歌人篇 おうふう 一九九八年
- 平塚市博物館編・発行『相模国の古墳―相模川流域の古墳時代―』二〇〇一年
- 大脇由紀子『古事記説話形成の研究』おうふう 二〇〇四年
- 岡崎義恵「教材としての古典文学『弟橘媛』について」『文学』第七卷第二号
一九三九年二月
- 土屋尚「弟橘媛考」『國學院雑誌』第六六卷第四号 一九六五年四月
- 志田諄一「穂積氏の伝承について」『茨城キリスト教大学紀要』第六号 一九七三年三月
- 前川明久「ヤマトタケル東征伝説の一考察―弟橘媛入水説話の成立をめぐって―」『日本歴史』第三三七号 一九七六年六月
- 高橋辰久「弟橘媛について」『文学研究』第六八号 一九八八年二月
- 田中智樹「倭建命系譜考―系譜に記された『入海』の意義―」『古事記年報』四五
二〇〇三年一月
- 拙稿「『常陸国風土記』倭武天皇と大橘比売命伝承考」『目白大学文学・言語学研究』第
一号 二〇〇五年一月
- 田中千晶「オトタチバナヒメの祈り―入水の因の誕生と変容―」『甲南女子大学研
究紀要』第四四号 文学・文化編 二〇〇八年三月
- 小村宏史「ヤマトタケルの東征―『さねさし』歌謡に導かれる王化の要素―」『古事記
年報』五一 二〇〇九年一月
- 拙稿「『古事記』弟橘比売命入水譚の一考察―「伝承文化研究」第九号 二〇一〇年七月
- 小林真美「地に沈むオトタチバナヒメ銅像（佐渡丸遭難記念碑）」と受容者・飯塚玲児
―『東京消失』から、走水神社、旧海軍司令部壕へ―『國學院雑誌』第
一一二卷第一号 二〇一一年一月

付記

本稿は、拙稿「『古事記』弟橘比売命入水譚再考」（『弘学大語文』第四四号 二〇一八年三月発行予定）の前段にあたる。あわせてご覧いただければと思う。